南方古夷に就て

(一)

晩近我學界に起りつゝある較著なる一思潮の東洋學(オリエンタロジー)建設にあるは、その由來が西人の研究の旺盛なるに促されたると、若くは全く眞摯なる國民的自覺の發露なるとを問はず、寔に機宜をえたる吃緊の事相なるは何人も異議なき處なるべし。それ業已でに東洋學の建設といふ、其建築の成る、必ずやそれが基礎として印度石、支那石、印度支那石等無かるべからざるのみならず、所謂日本學の建設その支關を爲し、所謂中央亞細亞學其屋蓋を做すの準備ありて而して後冀はるべきや又人の疑ふべからざる所なると共に其前途や春江の洋々たるものあるを見るべし。何となれば、單に支那の一基石を得るについても猶且つ數人數十種の意匠工夫無かるべからざればなり。

抑も支那文明の起源及び其發達に關する研究は、全般を包含する支那社會誌の集成と、之れよりする科學的思索と、兩々相俟て方めて遂げらるべし、而して所謂支那歴史、所謂支那哲學の研究は、その文獻の取捨如何に因つて、造詣する所亦大同小異ありと雖も、古來の研究已でに殆ど其蘊奥を叩きたるに似たるあるのみならず、近者又其經濟法制の研究漸く其緒に就きたるを見る。然れども總て是等を一束して負ふべき文明のエジェントたる人種の始末に關する探幽の如きに至ては、則ち未だ必ずしも大に見るべきありといふに至らざるかの觀あり。蓋、支那を寨內外に別ちて、其人種に對する考察をなすが如きは、固にその研究の第一歩にして、かの文字の言語學的研究の如きを含んで、遂に到達するあるべきや明なり。果せる哉其寨外なる者に就ては、既に大に成果を示しつゝある者我學界また其人あり。獨り其寨內なる者に關しては、一二著明なる人種に關するの外、未だ多くを見ざるかの憾なしとせず、敢て言ふまでもなく、所謂寨內人種中に在て其漢人種に關する攷察は、かの傳說的、神話的分子の吟味さるべき一二を除きては、もはや加ふべきもの無きに遍きに拘はらず、此間の異人種(支那人は自己と種を異にする者——漢人種ならざるを都て異人種と呼ぶ)研究に於て放埒なるは、眞に「支那石」の十分なる彫刻を期する者の遺憾とする所なりとす。試に南方古夷の一二に就て略述せんとす

るは、決して之れを以て彼を充たさんなどゝ云ふには非ざれども、試に其必要を提撕せんとするのみ。

惟ふに、寨內異人種の研究は、一般に涉るものと、其特種的方面に局るものとの二項に岐たるべし、而して土司研究の如きは正に其後者に應ずるものなり。土司は唐代夙に之れを置かれ、明代、甘肅、四川、廣西、貴州、幷に雲南の五省に於て盛に配置せられたる邊疆防備の一行政官廳なり、その異人の酋長を以て任ずると、中央より簡派するとの別に由りて、自ら土司土官の二目ありといへども、それらの治下にあるは胥共に邊土の異種たるは土司制の來歷之れを語るところにして、是れ寨內異人種研究の特種的方面は、土司研究に依て遂げらるべしといふ所以なり。今南方古夷と題するは、這般土司に於て就中其雲南に在る者について見んとするを以てなり。然れども學術上よりする確說の未だ雲南異人に關して信憑するに足るもの無く、吾人亦その一二の異種に關して實地見聞したるあれども、固是れ滄海の一粟のみ、隨ふてこれが全般に亙りて責任を以て敍述し、斷定せんは難し。今暫く昨夏草して藏せるものゝ一部を割き、支那人の手に成れる記錄及び一二歐人の說を敍し、以て「支那石」の一分子をうるの準備の一端に擬せんとするのみ。讀者之れを以て單なる三才圖繪單なる人國記となす無くんば則ち可なり。

(二)

支那人の記錄が載する南方古夷に關する攷察は、別に手稿として筐底に沈藏しつゝある土司考中の群蠻沿革略志に詳述しあれども今之れを述べん餘白を有せず、且つ此際必ずしもそを須要とせざるを以て、之れを省き、只その主要と覺ぼしきを列擧して、識者事餘の一粲に供し、兼て以下記すところ、佛人記事中に見ゆる名目の漢字に該當するものゝ何なるかを想察するの便に供し、且つ支那人が或は音譯し、或は寫聲したるものゝ比較的に興味あるものを揭げたる南方古夷と題する一冊を首めに紹介せんとはするものなり。南方古夷の著者の何人なるかを知らずと雖も、恐くは是れ好事の博識が倣したるものなるべく、その服色、その食住によりて同一種に或は數名を施し、添ふるに一流の彩畫を以てせるの滑稽は一々擧ぶに當らずといへども、間々見るべきものあるが如きを以て、慈ひに取舍を加へずこゝ

に其全部を戴せ、時に異本と校合する所ありたるものなり。

龍人　臨安府(雲南行省内にあり、以下各府縣廳皆同じ)所屬の地方に生る。性情朴直にして、男は耕し女は織り以て生を計る、其俗足を裹み頭を覆ふに青藍布を以てし、耳に大環(支那人通常之れを璫といふ)を貫く、書を讀み禮を知る事漢人に異るなく、歳正月に次るや、垣裏鞦韆一架を設け、男女共に相樂むを例とす。

糯比　元江州所屬の地方に生る。性情粗魯、好んで山間に僻處し、刀耕火種掠を事として、他を省みず。得るに隨ふて食となし生を計る。男は短褲を穿ち、女は短裙を纏ふ。蓬頭赤足、盜生を計る。身に紅綠白諸色の布を以てつくれる衣服を着け、頭また諸色の布を以てまくこと數圍、所謂大頭の實を示し、璫を下げ、足を裹む(圖書集成には赤足とあり)常に歌唱を好み、名けて跳弦といふ。娘子私かに出でゝ山に入りて人と共に飲酒す遇々父母兄弟之れに會するあれば、則ち鷄一雙酒一壺を用ゐて婚約を成し、婚時與ふるに耕牛一頭を以てす。

大頭猓猡　新平嶍峨二縣順寧楚雄二府地方に居る。性情淳和、田園に栽種して

lung jen

no pi

ta'tonkuolo

圖書集成には順寧府別に小頭猓猡あることを記し、且つ其習俗好尚大頭猓猡と同じきを記せり。猶ほ曲靖府志には猓猡者爨蠻盧鹿之裔と誌せり。爨王は今の雲南省城附近一帶を領し、其族烏爨白爨に別れ、就中烏蠻最大にして唐が此地方を服して東京を建つるに至る迄、大に跋扈せるものゝ由雲南通志に審なり。

黑猓猡　寧洱、東川、元江、鶴慶、定遠等諸府州縣所屬の地方に居る。性情忠厚、男女共に青藍の短衣短褲を穿つ。酒を釀して飲み、獸を屠りて喰ひ樹皮を蓋として雨を遮る。

永昌府志、黑猓猡或謂紫家、或謂名家、又黑猓猡爲滇夷貴種、凡土官營長皆其族類散居順寧、楚雄、蒙化等處云々(皇朝職貢圖より引用)と記し、南詔野史の錄するところ亦之れと相似たり。

白猓猡　鎮沅廳所屬の地方に居る。性情黑猓猡に同じ、耕作をつとめ、身に藍白布を纏ひ、時に或は羊皮を着く、多くは弩鏢に練熟す。此種について特に記すべきものあり、毎歳六月廿四日を以て年跳(原文のまゝ)とし、男女相連れて高きに登り、枯草散木を聚めて火を點し、酒を飲み、歌を唱ふ、之れを名けて跳笙とするこれなり。

hei lolo

pei lolo

蓋、苗族間の風習に相似たり。

雲南通志稿は皇朝職貢圖の文を引いて、白彝々於夷種爲賤雲南等府皆有之云々といへり。恐らくは烏蠻(烏爨の別稱)の强大に若かざりしの謂か。

瓢頭、窩泥　寧洱府所屬の地に居る。性情愚蠢なれども、耕種の事を知り、以て生を計る。男は青藍の短衣を穿ち、女また同色の短衣短裙を穿ち腰に海色數串を繫ぎ、竹筒水を裝ふて持ち、耳に大鐶を貫き、胸に巴子刀を掛け、以て飾りえたりとなす

piao t'ou-u wo ni

此族又時に庸役の徵に應ず。

卡墮　或は犵狫と書く。鎮沅、普洱、沅江、新平諸州縣所屬の地に居るものなるが、是れはた性情愚蠢、男に短皂衣褲を穿ち、女は短皂衣裙を穿ち。嗜好する所窩泥と同じく、山地に耕種して生を計るその徭役に應ずる亦前者に異らず。

ka to

民家子　思茅、鎮南、元江等諸川縣所屬の地に生れ、好んで白色衣服を着け、且つ入會にその頭を包む。栽種紡織すること、內地民人と相似たり、每日市街に出でゝ支那人と買賣し資をうれば則ち酒を飲み淫に荒む。

民家語を用ゆる族卽ち是れなり。蓋し、その純なるは、更に北方維西廳雲南縣に

min chia-a tzu

在るを最とすべきが如し。一本に、民家卽僰人也或謂之那馬居維西云々とあり

Kuo hêi

猓黑　威遠廳所屬の大山中に生れ、巖居し、野處す。客貌醜怪、性情惡竦、敢て耕種を勉めず、男女共に青藍衣褲を穿つ。刀弩に熟達し、山道に嶇居し、刼掠して生を爲し、生牛肉を下物として斗酒を傾くるを以て無上の喜とす。

舊雲南通志は伯麟圖說の說を引いて、猓黑は僰蒲の別派なりと斷じ、且つ、大猓黑小猓黑の別あるを說けり。

k'u tsu'un k

苦葱　多く寧洱地方に處る。性情粗野、男は青藍の衣褲を、女は同衣裙を穿つ、居處一定せず、燒炭割艸以て生を爲す、好んで臭辣を食するが故に此名あり。

kêi wo ni

白窩泥　他郎、石屏等諸州所屬の地に生れ、性情黑魯にして、男は青布の短衣褲を女は同長衣短裙を穿つ。燒酎を好み、臭辣の物を食ふ、沙鍋を販りて生を爲す。他郎廳志は別に黑窩泥あるを記せり。

pa i

僰夷　思茅、寧洱、楚雄、鶴慶諸府縣廳に往り、性情淳良にして、男は書を讀み禮を知り、女は勤儉家を治む、耕田種地、服食起居內地民人に比して其差甚だ遠からず。

圖書集成僰夷に關して下の記事あり曰く、不事詩書、崇信釋敎、誦經、謂之諷垣、寫字

謂之佃利、其字横行云々と。而して南方古夷の著者は別に旱(或は漢)玀夷、水玀夷を擧げて、僰夷と分ちたれども、其記事によりて察するに、必しも別物には非ざるが如し、況や其所屬の地方を同うし、其生業を同うするに於てをや。且つ曲靖府志が分猓猡爲四種、白夷、黑夷、玀夷海猓猡云々と記せるに依て見るに、是等は都て猓猡の支族なるが如し、皇朝職貢圖に僰夷一名玀夷(同志)とある亦此謂なり。さて兎も角も是等種族を以て一宗族に歸するとするも、更に其所謂宗族の何なるかは依然として問題なり。其字横行とは果して何事をか語らんとするものなりや、後節佛人の所論を參看し、且つ結末に至りて數言するところと併照すべし。

旱玀夷。水玀夷　共に寧洱、新平、元江所屬の地に在り、性情或は淳樸、或は疲軟。其田に種ゑ川に漁する、男の白衣青褲を穿ち女の青白短衣と紅布の裙を纏ふは共に同じ。只淳樸なる甲の閑を媮みて歌唱し、鏢弩を練習するに反し、疲軟なる乙の耘作に勤勉なるは一奇なりとす。共に又納税應役し、死後乙は火葬を俗とす。

Lun pai i
Shui pa i

卡高　寧洱府所屬の地に在り、性情蠢蠻にして、男女共青藍布の大衣褲を穿ち、山地を耕して業を營み閑あれば蕉等を採り、之を市場に鬻ぐ、その好んで食ふは酸臭のものなり。

Ka kao

三作毛　思茅廳所屬の地に在り、性情和平にして種茶を業となす。身に麻布の衣褲を穿ち、髮に三作を蓄ふ、土人の傳ふる所に據れば、諸葛侯曾て此地に至るや、彼等は一族の目標を明にせんが爲に頭髮を三處に分ち、中間は所謂髮名の留まる所として右は父母の留まる所、左は本命の留まる所なりとせるより、此名起れりといふ。足に紅或黑の籐襪を穿ち、閑時野獸を打ち、孔雀を逐ふ。

Sun tsuo mao

猓蠻　寧洱所屬の地に在り、性情愚直男女身に青藍衣褲を穿ち、腰に海巴數圍を纏ひ、耳に大鐶を懸け、赤足を以て行く、種を栽ゑて糧を襍め、竹器をつくりて業を營む。

p'u man

緬和尚　思茅、威遠、寧洱所屬の地に在り、男女俱に頭上一束の髮を有し、且つ頭を包む、上部裸身して腰に紅黄の紬布を捲く。飲食葷を忌まず、人の至るに會せば、頭包を去り、鞋を脱ぎ、跪いて遞に經を念ず、而して漢人の如く讀書を好み、字を寫すに貝葉鐵筆を以てす、十八九歳に至れば、還俗して婚姻す、死後火葬す。

Mien hê-shang

卡瓦　威遠地界に在り、夷中の最も凶惡なるものにして、常に野處し、耕種を知

Ka wa

らざるに非ずと雖も、紅頭纏腰手に利刄鏢弩を持ち、山道人を要して、掠殺し、其頭をとりて、樹上に置き飛耳張瞻の狀を見て以て年豐の賀とし、其靡爛するに及んで、更に他の人頭をとりてこれに代ふ。

猺子　pên tzu　九龍江外に在り、喜んで糯食酸物を用ゆ、其眞猺に在ては頂心に白點をつけ、且つ其頭目は頭に紅若くは綠の將巾を帶び、身に大衣を穿ち、百姓は多くは、裸身にして耕種して年貢を納れ臣と稱す、死後火葬するは一般の俗なり。

以上は南方古夷所載の大略なり。多くは一樣の記事なるのみならず、全く稗史の類とも見るべく、以て何等の得る所無かるべしと雖も、其品類稱呼の以て次項記す所のそれらと併照するに於て、必ずしも委つべきならざるが如し。

猶ほ雲南異人に關し、曾て昆明に遊べる當時、眼に映じ、耳に達したる者共に就て若干調査せるものあり、記す所もとより如上と異る無しと雖も、所謂異人志の概括に於て其雲南の西北にあるものゝ記述も或は一個の資料たるべきを思ふて、之れを附す、勿論是等の數者に關しては、吾人別に其言語文字に關して記すべきもの手にありと雖も今般の所詮に於ては敢て之れを必とせざるを以て、暫く之れを握り置くことゝせり。

維西中甸地方は雲南の西北或は西藏に接し、或は緬甸に、或は老撾に境する處所謂崑崙山脈中の山中に住する民族を以て充たさる、而して今記せんとするは其目星きものを擧げたるなり。

獠子　mu tzu　其面黃色にして永く洗はず、蘇布披革を衣となし、跣足にして曾て鞋子を用ゐず、弩を以て鳥獸を捕へ生を爲す。

獠　li su　獠子と略ぼ同じ。

龍巴　lung pa　面黑紅色にして、黑氈氈衣を纏ひ、黑珠數を携へ、讀經行脚を以て生を營む。蓋喇嘛の一種か。

喇嘛　lam a　或は拉嗎と書く、面色同前、紅或黃の帽を戴き、紅氈氈衣を纏ひ、紅珠數を携へ、烏拉靴を穿ちて遊行す。喇嘛の字は寫音にして、僧の意なり。別に姑猻と稱する一族あり、風俗行狀喇嘛に同じ。

獠　no lsich　紅腊打と呼ぶ一種の冠を戴き、紅色の半衣を穿ち、腰部以下には白色の裙を纏ふ、皮製靴を用ゆ。

利米　多く順寧府に在り、狀貌黝黑にして、頗る蒲蠻に似たり。男は竹絲帽を戴き、麻布の短衣をつけ、腰に繡囊を下げ、女は別に青布にて頭を裹む男女共赤足なり、(皇朝職貢圖に詳記あるよし、記に見えたり)。

li mi

蒙化夷　略ぼ猓猡に似たり、順寧府屬なり、同府志に曰く、蒙化より來れるを蒙化子といひ、楚雄より來れるを楚雄子といふと。

mêng hua-i

獞家　羅平州にあり打見たる所全く漢人と異らず、蓋、路傍見る所のものは既に漢人種との混血なるべく、從ふて明瞭なる記載ある能はず。獞家或は狆家といふとぞ。

tung chia (or chung cha)

回子　雲南一帶の地に散居す。但恩安州最も多し、かの阿迷州に在りて、特に土耳古族と呼ばるゝは、殆ど一般が既に混血にして何の奇も無き中に就て、幾分その風俗に於て特種なるが如し、其豕肉を食はざるその阿拉比亞經を音讀するは漢人社會の人として、特に一個の特異なる現象とも見るべし。余の藏する天方性理、天方典禮、幷に天方至聖實錄年譜等這般の委曲を記し、廣輿記等には回族者由陝遷來而播遷時非阿拉比亞種云々と述べたり。

hui tzu

木邦人　支那人曾て木邦を征め、その人を擒し來りて滇に質たらしめて以來、東川府附近猶ほ其餘薛を存すといふと雖も、其維西中甸地方に在るは、既に混血にして、風俗に於ても之れを分別するに難しといふ。

mupang jên

此他交趾族の臨安府蒙自縣にある事、山蘇及猺人の元江、新平に在る事それぞれ記あれども、既に人の知るものゝ外特に記述すべきなし。

以上要略如件。學術上未拓の地之れに依て幾分開墾すべきものなる所以の一由ともならば幸のみ。若夫れ比較的に體をえたる論述の如きを求めば、則ち次の一項是れかもとより之れとて人種學上の定案とするには足らざるものなり。

(三)

已でに揭げたる如く、雲南異人の數の夥多なる寔に人をして應接に遑無らしむるものあり。然れども若しその銘々について、分化し派生し來れるものゝ系統を繹ねて、劃一的方法に入らんか、或は案外小數の所謂異人を見るやも未だ計り難しと雖も、如是を猥りに概括し、限定し、斷定せんはその多數を列擧するの迂なるより

も更に恐なる無しとせず。只恐らくは何人も首肯すべきは、回子、猓猓(爨蠻、獠夷を含む)。猺人、(狆家)、苗子及び西藏種たる喇嘛の數種あるべき事是れなり。

さてコマンダン、ボニファシーが、東京(トンキン)クレール河流域の人種に關して實際調査したる結果は、稍々精密なるが上に、その一々について各風俗面相を示すに足るべき寫眞を附したるを以ておもしろく、殊にクレール河は、源を雲南省開化府附近に發し、河内に近く、東京河に注ぐものなるがゆゑに、斯地方に在る人種の雲南のそれらと相似たる、若くは同種なるあるは、吾人をして、南方亞細亞のアボリジンス研究に關する曙光の幾分を彷彿せしむるものあり。故に先づその掲げたる名目を列し、次に印度支那にも在り、支那(雲南)にもあるものに就ての小說を試みんか。

Les Groupes ethniques du bassin de la rivière claire. Par le Commandant Bonifacy.

(A) 名稱の列擧。

(I) 安南語系に屬する一團

1. Thai, Thô noirs de Baolac.
2. La qua ou Pen ti lolo.
3. Annamites montagnards.
4. Thô meridionanx.
5. Thô blancs de Hà giang.
6. Heu i.
7. Nong an de Hoang thu Bi.
8. Giáy.
9. Trunchu.
10. Kè lao blanc.
11. La ti.

(11) 支那語系に屬する一團

12. Man ou Yao.
    a) Tribe Quân côc.
    b) 〃 〃 traug.
    c) 〃 Lan tien.

d) 〃 Cao lan.

e) 〃 Siao pan.

f) 〃 Ta pan.

i) Les petites cornes, en chinois: Tou kõ yao; en man: ngõn nan miẽn.

ii) Les grands cornes, en chinois: San kõ yao; en man; ngõn dao miẽn.

iii) Les yao bananes, chinois: pa tsiao yao; man: homme au couteau rond, du cun miẽn.

g) Tribe Pa teng.

h) 〃 Na ẽ ou Nong ẽ.

13. Mèo ou Miao.

a) Les mèo blancs, chinois: Pë miao.

b) 〃 〃 rouges, chinois: Hon miao.

c) 〃 〃 à tête penchée, chinois: Pien teou miao.

d) 〃 〃 noirs, chinois: Heu miao.

14. Lolo.

a) Mung ou Muong.

b) Lolo noirs.

c) 〃 blancs.

d) Pu la.

i) Pu la de la tribu pũ p'à.

ii) Pu la cho cõ.

Thõ ti (t'ou sse).

(B) 右名稱中雲南異人に關するもの

百夷と呼び三十七蠻と號する雲南異人に對する科學的研究の至難なるは、夙に此方面に熱衷しつゝある西人間猶且つ定論を見ざるにても知るべし。今はた同氏記載中雲南にもありとする人種について、余の曾て通過目擊せる地理的關係より、首肯するに足るものを列擧するに止め、餘は斯道達識の示導に俟たんとす。

(甲) Thõ 或 Thai は印度支那の北部に住する民、其白黑兩種を合せば、頗る多數に上る

モルガン「古代支那」、「クラスト支那」の各其長とする人種なるものゝ中に、「ゲルランド」氏は其

著民族學地圖に於て、タイは全くシヤム人なり、シヤンレースなりとせり。是れトーを土の意とし、土民といふ意を解したるよりも見當あるが如けれども之れを以て確覽と認めんは難し

ものにして、安南語を用ゐる系統に屬す。而てThaiは雲南にてPai（猓夷或僰夷）なりと云ふ說にして確ならんか、前項記せる僰夷（或猓夷）の一族は印度支那より雲南の各地方（前項參看）に來住せるものならんかボニファシー氏曰く（以下の引用皆同斷）

トーはまた雲南に在てバイと呼ばる、二者の名全く格別の如く聞ゆれども、T音がP音にかわるは、他の國語に於ても亦之れを見る所なり。

(乙) 同じく安南語系に屬するGiáy（寨）と稱する一族あり。Giáyはもと彼等自身の稱呼なれども、支那人は之れを呼んでPaiといひThoといふ。蓋、Thaiと同一種に屬するものか。元來支那人は一瞥の直觀に依て命名し、之れを別種とするの癖あると共に、動もすれば總括的に人種を見んとするの風あるも亦免れざるところなれば、必ずしも俄に信ずるに足らずといへども、GiáyはThaiと同種にして、其一支系なるに非るか、は一個の疑義とするの値あり。同氏曰く、

ジアイは、雲南の東京に接する處なるクレール河邊に住す、其地理的關係より之れを見れば、或はトーの一族の如けれども、其風俗は全く異れり、例へばトーの衣服に比して、ジアイは全く襟をつけざるものを着るが如き是れなり。

(丙) 同じく安南語系に屬する者にTrungchaといふものあるは蓋獞家或は狆家ならんか同氏曰く。

狆家或は家人といふ、貴州、廣西雲南各地方に之れを見るのみならず、河陽(ハキャン)の北方二十五キロメートルの近隣亦之れある少らず、彼等の家屋は柱によりて建てられたるものに非ず、彼等の文言はトーとは別なるタイの一種たる俗語なるが如けれども、彼等はまたタイ語以外の多くを有す、例せば、人をvânといふが如し、又nとlとは一般にyによりて代らる、卽ちトー族が水をnamといふに反し、此の族は之れをyamといひ、又トー族が風若くは發聲をlomといふに反し此族は之れをyeumといふが如しと。此族或は重家重甲とも書く。

(丁) 同じく安南語系に屬するものにHeuiといふ者あり。或は黑夷なるべしとも思はるれども今其始終を審にせず、同氏曰く。

Heuiは、東京一般殆ど見ざる所にして、唯保樂(バラック)府屬の南關（廣西に接する地方）の北方地方に在るのみ。支那にては、廣西の西方、雲南の東方に之れありと。

(戊) 言語系統を支那人と同うしつゝ、安南人よりも支那人よりも共に異人と呼ば

るゝものゝ主なるは、Man 或 yao; Meo 或 Miao 是れなり。察するに此族は先づ支那の文化に浴し、遂に以て安南にも播遷したるものか、否らざれば、雲南東京界域に住せるものが、支那の征服する所となり、幷に其文に化せられたるものか。兎も角苗猺二人種の如きに關しては、我國學者間に在りても、猶且西人に駕するの研究ありといへば、更に絮說するの要無るべし。

(己)　緬甸、西藏語系に屬する一族、支那、安南またこれあり。而して Lolo は其代表的なるものなり。玀玀の種類の雜多なる事前記によりて見るを得べし。ボニファシーが、雲南開化府、東京廣南府附近にありと限れるは、むしろ或一種のロ|ロにつきて立てたる言ならん。ロ|ロ或は猓玀と、或は玀猓と、或は玀々と記して呼ぶ。ボ氏のロ|ロ說頗る委曲を悉せり、今雲南開化府等の附近に在る白ロ|ロに關する記の一節に曰く。

白ロ|ロは自ら呼んで Mān ma といふ彼等は支那人が往々にして長毛ロ|ロと呼ぶが如く、長髯を蓄ふ、保樂府の北方よりつゞいて雲南の開化府廣南府に在て、黑ロ|ロと雜居す云々。

言語關係佛學第三記
ロ|ロ其他方面に就ては東洋學報第九卷第號に詳細なる見
ロ|ロ

(四)

安南異人誌より推及せる雲南異人誌の一節略ぼ上の如し、依て惟ふに、雲南異人は

支那語系に屬するもの
安南語系に屬するもの
緬藏語系に屬するもの

の三種族に概括するを得べきが如く、かの雜樣の名目あるものは、釋ぬれば皆夫れ〳〵適處に歸すべきものなるが如し。只此に如何にしても看過すべからざるは回教徒の一族なり。支那全土にわたりて人種上の攻察を遂げんには、所謂人種研究の三範疇以外、宗教を其標的とすべしてふ說の耳を傾くるに足るものあるが如く、回教は支那に於て、頗る强大なる勢力を有するものなれば、之れに屬する族の調査は趣味あり、實益ありといふをうべし。回教徒(卽ち支那人の謂ふ回子)は全然異人種なるあり、支那人なるあり、はた處によりては混血なるあり、而して其誦すると

ころは回教國の語にして、その語る所は支那語なり。

猶ほ茲に一言ロロに及び置かざるをえず、若しロロは全然西藏緬甸語族なりといふボ氏の提案にして承認すべくんば、其雲南に在るの員數によりて、はた其沿革の古きに於て、往昔の雲南人は全く緬甸西藏より來れるものなるか、雲南は緬甸と其境界無りしの地なりしか等の問題起り來るべきなり。楚莊驕南征して、滇王となりし時彼を苦しめし爨王は猓玀なりき、諸葛侯が擒縱せりと傳ふる猛獲雍闓の徒亦猓玀なりしが如し。是等の點より見て、かのブリントン氏が亞細亞人種を二別して支那に屬する者を漢種、西藏種、幷に印度支那種とせるも稍々當をえたりとも云ふべし。もとより人種上の攷察は單に言語、單に宗教によりて確定すべきに非ざれば、今はた一節の問題として掲げ置くと共に、南方古夷の研究が、其造詣の方面に依ては支那文明の攷察に一助を呈するものなるを主張するに過ぎざるなり。

Brinton, Races and Peoples.

(五)

支那古文明の研究は宜しく那點より出發すべきかは、識者學徒各其感を異にすなるべきも土司の研究に發足準備を整へ、さて寨内異人種の文明より研究の途に上るが如きも亦其一ならずんばあらず、是れ未だ何等確實なる造詣無く、隨て漫然羅列し、唯々諸々受賣するに過ぎざる一文を草し、南方古夷と名けて文明論の卷末に附し、敢て先覺の教を乞はんとする所以なり。

○參考書目

雲南通志稿　大清會典
土官說　廣輿記
舊志論　大越地輿
滇繫　圖書集成(邊裔部)
雲南備徵志　天方性理
南詔野史　天方典禮

大清一統志
永昌府志
騰越廳志
昆明縣志
Pierre Pasquier, L'Annam d'autrefois.
Colonel Diguet, Les Annamites.
Commandant Bonifacy, 前出
Brinton, 前出
Annuaire général de l'Indo-Chine.
Douglas, China.
Morgan, Ancient Society: China.
Gerland, G. Atlas der Völkerkunde.

天方至聖實錄年譜
皇越地輿志
南方古夷
楚黔防苗

（明治四十二年六月稿）

明治四十二年十一月二十六日印刷
明治四十二年十一月二十九日發行

文明論叢
定價金壹圓五拾錢

編修者　東京帝國大學文科大學教授 マンブルード、ラ、ソシエテ、ド、ソシオロジイ、ド、パリ 文學博士　建部遯吾
著作者　日宗大學講師 宗教大學講師 文學士　江部淳夫
發行兼印刷者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社
代表者社長　原亮三郎

東洋印刷株式會社印刷

發賣所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座八八一五番　金港堂書籍株式會社

不許複製
檢印
社會學論叢

ㅋ·6X 26

建部遯吾編修

社會學論叢

第一卷　戰　爭　論

東京帝國大學文科大學教授
マムブル、ド、ラ、ソシエテ、ド、ソシオロジイ、ド、パリ
文學博士　文學士
建部遯吾著

戰爭論は戰爭の本質を明にし、戰爭の起因戰爭の效果を詳にし、世界平和の問題及戰爭の將來を斷論して明快的實、實に著者別に著す所の經世時言と併せて、明治三十七八年時局の前後、著者が聊か言說を以て君國に獻替せる紀念にして、當時實に　兩陛下　兩殿下乙夜の覽に入るの光榮を荷ひしもの思を當世有用の學に潛むるの君子は、必ず一讀を吝む可らず。

第二卷　日本之社會

東京女子高等師範學校教授
東京帝國大學文科大學講師
文學士
小林照朗著

本書は社會學の新見地より日本社會の髓腦肺腑を剖析顯揚せるもの、是を日本民族心理學と稱するも可、或は新人國記と稱するも亦可也、從來國學者又は歷史家の研究以外に立ちて、世界萬國興亡の眞因と我が國運の天壤無窮なる所以とを科學的に論斷し、博引旁證歷々掌に指すが如し、明治維新以來この種述作中確かに一頭地を抜けるの著たるは學者の夙に認むる所也、今や第三版成る、苟も天下の讀書子たるもの、此際必ず一讀せざる可らず。

78
75

039705−000−6

78−75

文明論

江部　淳夫／著

M42. 11

BDA−0290